ドクダミ

ドクダミは、たいてい日の当たらないやや陰湿な場所に自生する。

毒下しの妙薬といわれるドクダミ、名前の由来は毒痛み（毒にも痛みにも効く）からとられたであろうと言われている。又、十種の薬に値する。十種の病気に効くということで「十薬」。重ねて薬となるということから「重薬」とも呼ばれる。佐賀の方言としては、この薬がワクド（ガマガエル）が好む湿りけのあるところに生えていることから「ワクドクサ」。又、トベラグサ、ヘクソカズラ等とも呼ばれている。

昔から民間薬として広く使用されており、現在でもゲンノショウコ、ハブ茶と共に最もよく使われております。

日本のいたるところの生け垣の下や、裏庭などの日陰に生え、多年草でさかんに繁殖する。全草に特異の悪臭がある。この悪臭の成分はカプリンアルデヒド、ラウリンアルデヒド、デカノイルアセトアルデヒドによるものと言われている。白色の地下茎が横に走り、葉は卵状心臓形で、先端は急にとがり、紫紅色を帯びて、サツマイモの葉のような形をしている。梅雨のころ白色四片の十字状の花を開き、ガクと花弁とがない細かい花の集まりである。「どくだみや真昼の闇の白十字」「どくだみの花の白さに夜風あり」等と吟まれて親しまれている。

採取時期は花期（梅雨の頃、この花の開花が梅雨入りの目安になる）で、この時に地上部全草を取り、日光に2日ほどあて、あと日陰干しして乾燥して適当の大きさに切り、紙袋に入れて貯蔵しておく。

薬効

一成分のデカノイルアセトアルデヒドは、カビの発育をおさえ、白癬菌の水虫、たむし、いんきんたむしなどに抗菌性を示す。又、化膿菌に対して殺菌作用もある。

昔から腫物を吸い出すのと、毒下しとに用いられており、そのほかに痔疾患、鼻の病気、打撲、切り傷、毒虫にさされた時、カイセン、かさ、尿道炎、又、毛細血管強化作用もあるので、高血圧、動脈硬化、心臓病等にも用いられる。

使用法

はれもの　生の葉を火にあぶってやわらかくして、はれもののおおきさに丸めて、患部にのせ、バンソウコウで止めておくと、早く膿を吸い出し、痛みも少なくてすむ。又は火であぶってからもんで汁を出し、それを患部に塗ってもよい。

痔ロウで痛みかゆみのある場合　生の葉に塩少々入れて、すりつぶし、脱脂綿にのばして肛門にはる。干したもの20gを、水600mlで40～50分火にかけて、その半量になるまで煎じて、一日三回に分けて飲む。

蓄膿症　一日20gを水500mlで、半量まで煎じて、空腹時に一日三回に分けて飲む。少なくとも二ヶ月以上連用しなければ効果があらわれない。生の葉4～5枚を塩でよくもみ、汁の出るくらいにして、まるめて鼻の穴の片一方に挿入し、30分位で鼻をかむと、ウミのような鼻汁が出てくる。これを一日3～4回行うと非常に効果がある。又は、夜床につくときに、鼻の穴片一方につめ、そのまま寝て、約5時間程経過したらとり、鼻をかむと、悪臭のある膿液が出る。その後、もう一方の鼻の穴に同じようにして寝て、翌朝起床のときに同じように鼻をかんで膿液を出す。一日だけでも、翌日は更生したようにさわやかな気分になり、3～4日後には、吐く息にも不快な悪臭がなく、膿液も少なくなってくる。2～3週間続ければ、膿汁はすっかりとれてしまいます。

高血圧、動脈硬化　干したもの20gを煎じ、毎日お茶がわりに飲む。狭心症、動脈硬化を予防し、脳出血の予防にもなる。

腰痛、冷え症、痔　煎汁を浴剤として利用する。よく温まり効がある。

水虫　生葉を塩でもんで、やわらかくして患部にあてる。

便秘　15gを煎服する。2～3日続けても排便のない時は、増量してセンナ葉15枚位加えるとよい。又、ドクダミ15g、大黄2gを合せたものを煎服するとよい。

にきび　ドクダミ30gとハトムギ皮付きの粉末20gを1日量として煎じて服用する。又、ユキノシタの生葉をすり合わせたものを患部にはる。

ジン麻疹　ドクダミ20g、ゲンノショウコ20g、決明子（はぶ茶）20gを含ませたものを1日量として煎服するとよい。

毒下し　ドクダミ12gと忍冬8gを1日量として煎服する。

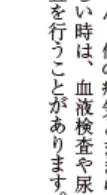
いぼ　ドクダミ15gとハトムギ20g合わせたものを煎服する。

髪を美しくするには　ドクダミ15g黒豆25gを煎じてお茶代りに服用する。

夜尿症　ドクダミを濃く煎じて、さかづき一杯ずつ、1日5～6回服用する。

知っていますか？ おばあちゃんの知恵

暑くなって、汗ばむ季節になってきますと、わきがは、他人はもとより自分自身もいやなものでございます。わきがは、腋窩（えきか）部の汗が悪臭を放つもので、多汗症を伴うことが多く、その発汗によって悪臭が、一層増加するそうです。これには、焼ミョウバンをガーゼに包み、打ち粉にして腋窩（えきか）につけたものです。ミョウバンはなめてみるとわかるように、きゅっと舌が引きしまり、唾液が止まってしまうことから、汗を止める作用が大きいことがわかります。



薬剤師　高木　丈夫

こどもの病気シリーズ

突発性発疹

どんな病気

突然熱が出て、それが下がると同時に全身にぱらぱらとした赤い発疹が出る病気です。

原因はヒトヘルペスウイルス6型、又は7型によるもの。はしかや水ぼうそうほど感染力は強くなく、また季節を問わずに発生します。生後6ヶ月から2才までの間によくかかります。初めての発熱がこの病気という子もたくさんいるようです。

症状は？

突然38～39度、時には40度近い高熱を出しますが、高熱のわりには元気で、熱が3～4日続いた後、急に平熱ぐらいまで下がります。それと同時か翌日あたりに、大小不規則な赤い発疹が出てきます。おなかや背中を中心に半日ぐらいで全身に広がりますが、かゆみはあまり感じないことが多く、発疹が出て2～3日後からは、だんだん薄くなって消えます。

ただし、このような典型的な症状が出るのは2人に1人の割合とも言われます。ほとんど熱の出ない子や下痢をしたり食欲が落ちたりという別の症状があらわれる子もいます。

症状で診断できる病気なので、通常は検査は行いません。他の病気とまぎらわしい時は、血液検査や尿検査を行うことがあります。

自宅でのケアは？

突発性発疹という確定診断ができるのは、熱が下がって発疹が出てからのことです。この間は他の病気の可能性も考えて、高熱＝突発性発疹と決めつけず、熱が続いたら小児科を受診しましょう。特に生後4ヶ月未満の赤ちゃんの発熱や、5日以上続く熱には他の重い病気のこともあるので注意が必要です。

突発性発疹と診断が確定した後は、安静と水分補給に気をつけていれば、特に心配いりません。特別の薬なしでもよくなっていきますし、合併症などを起こすこともほとんどありません。

しかし熱が高いために眠りが浅くなったり、水分が十分とれないような時は、解熱鎮痛剤を使ってもいいでしょう。ただ、解熱鎮痛剤を使っても、平熱までは下がらないことがほとんどですし、薬の作用が切れれば、また熱が上がってしまいます。

解熱鎮痛剤は、つらさを和らげるつもりで使う薬なので、熱が少し下がっているうちに水分や睡眠をとらせるようにしましょう。

養正会薬局　薬剤部